

## 巻頭言

今回の特集テーマは「周術期管理」である。病院の健全な運営において、手術は今や収入の3割近くを占める根幹事業であり、手術件数の増加は重要な課題である。しかも高齢化社会の真っ只中で、合併症を有する患者が増加し、術前・術後の管理に難渋するリスクもある。結果として、手術を安全・円滑に、かつ在院日数を減らしつつ、高速回転で遂行するためには、病院が総力を挙げて対応することが求められるようになってきた。

近年、多くの外科系手術が鏡視下で行われるようになり、麻酔の維持期は長くイベントレスな監視業務に変貌しつつある。さらに麻酔記録の電子化やモニター・テクノロジーの充実、働き方改革の波は、そのような単調な監視業務を医師以外のコメディカルやロボットで代替する可能性を生み出している。われわれ麻酔科医がこれまで手術場の守護神たらんとして注いできた多くのエネルギーをこれからの「医師」としてどう使うべきか？ その一つの解が周術期管理である。術前・術中・術後と横断的に関与できる麻酔科医は、周術期という大きなスキームの中で全体を俯瞰しフローをよどみなく流すための調整役として最適である。病院が総力を挙げて取り組む手術プロジェクトにおいて、麻酔科医が周術期管理に必要な専門医療知識、技術、経験を保持しているからだ。

本書を読むと周術期管理が、まるで一人の患者を守るために護船団が集結し、出航(術前)の地で入念な準備と計画を行い、手術の海に船出をしてからも本人に気づかれぬように荒波を乗り越え、術後という新たな地平にたどり着くまでの大航海物語と思える。クルーの一員として知っておきたい知識はもちろんのこと、船出にあたり、どんな乗組員が必要なのか、それぞれの役割は何かというヒントも本書には散りばめてある。しかも、先人が通ってきた航図に加え、これからの天候予想も載せたつもりだ。

是非、手術室という船室に留まるのではなく、甲板に出て潮風と太陽の光を浴びながら自ら舵を握ることも想像していただきたい。

自治医科大学附属病院麻酔科 周術期管理担当

鈴木 昭広